

## 《2004年7月例会－出張サロン in 伊香保－報告》

今年度の「出張」第一弾、「出張サロン in 伊香保」へ行ってきました。見知らぬ土地の自然や人や、勢いのある試みに触れ、出張サロンならではの密度の濃い1泊2日でした。セミナーの内容は後日送信しますが、まずは概要のみ報告します。

- I. JFL観戦：ザスパ草津 vs 国土舘大学
- II. セミナー：ザスパ草津の挑戦
- III. 懇親会：伊香保芸能の堪能
- IV. 伊香保周辺観光：ガイドブックには載っていない

\*\*\*\*\*

### I. JFL観戦：ザスパ草津 vs 国土舘大学

試合会場の「群馬県立敷島公園サッカー場」は前橋にある。信州へ行くときも上越へ行くときも通過する前橋は、いつも通過するだけで、降りたこともないし気にとめたこともない。改めて調べてみると、新前橋までは行きやすいが前橋へは両毛線に乗り換えないとたどり着かない、面倒くさいつくりになっている。それでも9:30頃上野発の快速なら前橋まで直行できるようなので、2時間電車に揺られて行くことにした。

前橋で上間匠氏と合流し（彼もこの電車に乗っていた）、駅前でお腹ごしらえをしてからタクシーで敷島公園へ向かう。運転手のおばちゃんがものすごく話好きで、「前橋には何もない」ことを力説していたのが印象的である。

この日のゲームは、敷島公園内のサッカー・ラグビー場で行われた。さっそく耳に入ってきたのは「スタジアム改修の署名をお願いしマース」の呼び声で、ボランティア（らしき人）と選手がともにやっていた。元アントラーズの小川雅己選手もいた（小川選手は累積警告で出場停止。ベンチ入りしない選手がサポーターとともに行っていた）。敷島公園のスタジアムをJ仕様に改修するための署名運動のようである。なかなか盛り上がっている。

入口下では、今回のコーディネーターである小林俊文氏が、ADカードを用意して待っていてくれた。松岡耕自氏とも合流し、スタジアムの中へ入った（嶋崎雅規氏は遅れて合流）。

まず驚いたのは、予想よりもはるかに多い観客の数である。おっちゃん、おばちゃんから子ども連れまで、地域のお祭りのような雰囲気、ザスパカラーの紺色12番が大勢いる。メインスタンド側は手拍子のみでおとなしいが、バックスタンド側の芝生席に陣取る一団は、J初期の「サポーター」という感じで、人数は少ないけどまとまっている。観客は2276人（だったと思う）と発表された。かつての日本リーグよりずっと多い。あとで賢持氏から「平均5000人入ります」と聞いた。J1、J2の下部にあるJFLがこうなっていたとは知らなかった。

今シーズンからJFLに昇格し、現在2位につけているザスパ草津には、元Jリーガーが期限付き移籍などで大勢やってきている。1998フランス大会の代表であった小島伸幸選手がコーチ兼任でいることは知っていたが、元ヴェルディの山口貴之選手がいることは知らなかった。「群馬県の選手が多い」ことはメンバー表をみればわかる。小島選手も新島学園高校出身だし、前橋育英や前橋商業で高校時代に活躍した選手もいる。群馬県高校選抜を指導したこともある小林氏にとっても懐かしい顔ぶれが並んでいるようである。「歴代群馬県高校選抜+α」という感じだろうか。これなら地元の人は応援するだろう。

もう一つ目についてしたのは、選手名の最後に書かれている、選手の職場である。「草津温泉病院」「草

津ホテル」「ベルツ温泉センター」…。テレビでみたことがあるが、彼らは日頃、草津温泉の旅館やホテルで従業員として働き、夕方から集まってトレーニングしている。従業員として働くザスパの選手と、職場や地域で日常的に接しているの、地元の人には応援するだろうと思った。職場が「光泉寺幼稚園」となっていた佐多聡太郎選手（前橋育英高校→サンフレッチェ広島）は、幼稚園の先生なのだろうか。スタンドの一角には「佐多先生応援シート」があり、ちびっ子とその親が応援していた。

13:00 キックオフのゲームは、前半を終えた時点で2-0。90分終了時には5-0と、ホームチームの完勝であった。国士舘大学にも注目していたが、大きな番号を背負った選手ばかりが出場しており、魅力に欠けるチームだった。JFLと大学サッカーをどのように位置づけているのだろうか。誰のささえを受けて取り組み、その取り組みはどこへ向かおうとしているのだろうか。ザスパ草津が明確なだけに、相手チームがよくわからなかった。

## II. セミナー：ザスパ草津の挑戦

試合終了後、小林氏の軽自動車に乗って一路伊香保温泉へ。30分ぐらいの裏道ドライブ（5人も乗っていたので）で到着した。宿は、伊香保の象徴である石段沿いの「丸本館」。セミナーの会場もこの一室である。しばらくするとザスパ草津社長の賢持宏昭氏が到着し、16:30頃からセミナーが始まった。非常に興味深い内容であった。近日中に改めて報告したい。

【日時】2004年7月24日（土）16:30～18:00

【会場】伊香保温泉丸本館内客室

【セミナー参加者（会員）】上間匠（東京大学大学院） 小林俊文（渋川青翠高校） 嶋崎雅規（帝京高校） 中塚義実（筑波大学附属高校） 松岡耕自（立命館大学体育会サッカー部）

【セミナー参加者（未会員）】賢持宏昭（(株)草津温泉フットボールクラブーザスパ草津ー社長） 篠塚太郎（日央ライフサービス(有)／カルチャースポーツクラブ） 豊島俊春（渋川高校サッカー部コーチ）

【セミナーテーマ】ザスパ草津の挑戦

【報告者】賢持宏昭（小林俊文紹介）

【報告書作成者】松岡耕自

## III. 懇親会：伊香保芸能の堪能

セミナー終了後、宿の温泉に入る。鉄分を含んだ湯は、本当に気持ちがいい。18:30から懇親会なのでゆっくりはできなかったが、いつでも入ることができるのがうれしい。

懇親会では、セミナー参加予定であった吉沢実氏からの差し入れ焼酎もいただきながら、ベテラン芸姑さんの芸能を堪能した。三味線の音曲にあわせた伝統的な踊りの鑑賞あり、参加型の温泉遊び(?)の余興あり。大変興味深く、不思議で楽しいひとときであった。テレビもカラオケもなかった時代、お座敷ではこうやって遊んでいたのだろうかあとと思った（女性会員も十分楽しめる内容でしたよ）。テレビもカラオケもあるいまの時代、こうした遊びを楽しもうとするお客さんが減ってきて、自分たちの出番もめっきり減ってしまったことを話されていた。現地で買ったガイドブック（400円のを200円で売っていた）には次のような記述がみられる。

「温泉の町伊香保で忘れてはならないのが、芸者さん。芸を競い、三味線や歌、踊りでお座敷を盛り上げ、温泉町に風情を添える。伊香保には芸者さんたちの組合があり、18歳から60歳代の芸者さん約70人が日々その芸を磨いている。芸姑協同組合の理事加藤智さんによると、最も華やかだった昭和20年代後半から30年代初めには200人ほどの芸者さんがいて、東京方面への伊香保の宣伝キャラバンに参加したり、伊香保の新作民謡を広めたりして、伊香保のPRに大いに尽力したという。時が移り、お座敷遊びを知らないお客さんも多くなったため、組合では観光客を生徒にお座敷遊びを指南する芸者大学を

“開講”、日本の伝統を伝える一翼を担っている」(『いい旅しよう！～もっと知ろうわが郷土～伊香保温泉編2002』アドバンスクリエイト(株)、2002年3月)

その後は、伊香保を“庭”とする小林氏の案内で、居酒屋「ふる里」(魔女のようなばあさんとじいさんがやっている)へ行き、「よしみ」というスナックへ行き、朝の3時頃まで温泉街を堪能した。温泉街ならではの、場末の楽しさと寂しさが同居した伊香保の夜は、「何もしなければ、老舗温泉街ですら寂れていく」という、温泉街の危機(現に週末というのに人影はまばらであった)を感じるとともに、同じ老舗温泉街である草津の挑戦の背景を改めて考えさせられた(と同時に“小林ワールド”の懐の深さも感じました)。

#### IV. 伊香保周辺観光ガイドブックには載っていない

翌25日は、小林氏と篠塚氏が、地元を案内してくださった。

伊香保は石段の周りが中心街となっている。石段を登ったところに伊香保神社があり、ぐるっとめぐって源泉がある。近くには旧ハワイ公使別邸(ここに別荘があり、100年も前から温泉街で国際交流が為されていたらしい)、伊香保御関所(宿場町でもある)などがあり、ここが古くから栄えた温泉宿であることを認識する。

その後、車でいろいろ回ってもらった。有名な(といっても私は知らなかったが)水沢観音や、ガラス工房、ワイン工場とめぐって、船尾滝でちょっとしたハイキングを楽しんだ。道なき道を歩いて滝壺までたどり着くコースは、地元の小林氏ならではの。しぶきが気持ちいい。

渋川町、東村、子持村と車で移動しながら「根古屋城温泉センター」でゆっくり温泉につかる。ぬるめのお湯が気持ちいい。くつろいだあと、篠塚氏おすすめの、子持村のそばやで手打ちそばを堪能する。有機栽培のキュウリがうまい。

篠塚氏の「カルチャースポーツクラブ」はそば屋からすぐのところにあった。クラブハウスは2階建ての立派な住宅で、ちょっとした合宿も十分できるような作りになっている。手作りのフットサルコートは2面あり、ベンチも手作り、照明の柱も自分で建てられたという。見晴らしがいい。ここで夕方から、少年や大人のフットサルをされているそうだ。

本業があるのでなかなか手が回らないこと、少子化と交通の不便さに起因する慢性的な「人不足」、会費を徴収すると「子どもから金を巻き上げて」と言われるような「スポーツへの未理解」など、様々な課題がここにもある。似たような問題はどこにでもあるが、行ってみないとわからない、その地域特有の課題があるのだなと感じた。

そして、困難な課題はあったとしても、「はじめよう」とする人がどこにでもいることがうれしい。

以上